

# 社会民主主義の国際連帯と生命力

〈リレー連載〉

リベラル・デモクラシーとソーシヤル・デモクラシー 2

加藤哲郎

## 1 崎村茂樹という経済学者を知らませんか？

私は、二〇世紀を生きたある日本人の軌跡を追って、英語及び日本語のホームページで、情報提供を呼びかけている。名前を「崎村茂樹(さきむら・しげき)」という。

東京で一九〇九年に生まれ、一九八二年に没した。戦前日本で東京帝国大学農学部講師(農業経済専攻)であったから、いくつが学術論文はある。戦後も拓殖大学教授・東京理科大学教授をつとめ、当時としては最先端の工業特許や知的所有権の研究・教育にたずさわったから、その方面で知っている人はいるかもしれない。語学の天才でもあった。経済学の師は戦時東大経済学部フアッシュヨ化の一翼を担う荒木光太郎教授であったが、ドイツ語は丸山眞男と同じく上智大学ヨハネス・クラウス神父に学んだ。とりあえず、研究者としての崎村茂樹の概要を示しておこう。

以下の資料収集とリスト作成にあたっては、前ヘルリン日独センター調査部長桑原節子氏、京都大学文書館助教福家崇洋氏にご協力いただいた。このほかの著作・論文ないし消息をご存じの方は、ぜひ筆者(Kaede@fujitsu.com)まで連絡してほしい。

崎村茂樹著作・論文一覽(二〇一一年 七月現在、筆者作成)

- 一九三三年 「満州農作物の銀資金 日滿経済発展の視点に立ちて」(農業経済研究 第九巻四号)
- 一九三五年 「農家負債問題の検討」(財政経済時報 第三巻八号)
- 一九三六年 「アメリカ銀政策の発展」(財政経済時報 第三巻二七号)、「アメリカ銀政策の本質と意義」(東亜 第八巻七号)
- 一九三七年 「オーブン・マーケット・オペレーションの矛盾」(外交時報 第七七七号)、「一般信用論に於ける組合信用の地位」(農業経済研究 第一三巻二二号)、「ハイエークの景気理論と利子説」
- 最近の新学説(1) — (3) (「ダイヤモンド」第二五巻一一・一二・一三三三号)、ヨハネス・ラウレス著『スコラ学派の貨幣論』(翻訳有斐閣)、「農村人口移動の階級性とその社会経済的諸要因」(福井縣下農村調査中間報告) (京野正樹・神谷慶治と共著)、「農業経済研究」第二三巻第四号)
- 一九三八年 「紹介 フリッツ・ノイマルク」(経済政策の新しきイデオロギー) (「経済学論集」第八巻四号)、「インフレーションと農業信用」(ドイツ・インフレーション下に於ける経験) (「農業

経済研究」第一四巻二二号)、「北支農村経済の諸問題」(「北支経済開発の根本問題」刀江書院)、「北支の幣制と農民経済」(「帝國農會報」第二八巻九号)

一九三九年 報告「事変下の農業問題を主題として」(「日本諸学研究報告」第五編・経済学)、「農業政策の社会哲學的基礎付け」への試み(其の一・二) (「食糧経済」第五巻三二四号)、「民族主義と農民」(「エコノミスト」第二七巻二六号)、「北支の食糧問題」(北京にて)、「食糧経済」第五巻二二二号)、「労働政策としての農業政策」(「農業と経済」第六巻二二二号)

一九四〇年 「日本農業技術の発展に関する覚書」(「農政」第二巻八号)、「朝鮮農民の内地農村定着」(「大陸」第三巻八号)、「稲作に於ける中耕」除草技術の発展過程」(「農業経済研究」第一六巻三三三号)、「北支の食糧問題」(東畑精一著「米」中央公論社、付録)、「北滿における小作形態の考察」(近藤康男他編「佐藤寛治博士還暦記念農業経済学論集」日本評論社)

一九四一年 「蘭印に於けるプランテーションと苦力政策の問題」(「新亞細亞」第三巻二二二号)、「国策会社と産業組合」(講演記録)、「産業組合」(第四二六号)、「報告」満州国建設と五族共和」(第三回日独学徒会談、チロル)

一九五六年 「通貨交換性と貿易自由化」(「拓殖大学論集」第二二二号)一九五七年 「EPUと通貨交換性」(「上智経済論集」第三巻二二二号)、「経営パートナーシップについて」(「拓殖大学論集」第二二二号)、「フリードリッヒ・ヒス・ゴースセン著」アメリカにおける利潤分配の実際、西ドイツの訪米視察団報告書」(翻訳、日本生産性本部)、「公正賃金とパートナーシップ」西独の労使協調はいかに行われて

いるか」(「経済往来」)

一九六〇年 「特許ライセンス研究序説、アメリカの反トラスト法との関連において」(「拓殖大学論集」第二五号)

ドイツ語著作 Neuordnung der japanischen Wirtschaft, Bremen: NS-Gauverl. West-Ems, 1942. (「日本経済の新編成」) ユアイマール大学ほか所蔵) Die Berufsbildung der Jugend im nazistischen Deutschland, in: Briefwechsel aus dem schwedischen Exil. (「ナチス時代のドイツの青少年の職業教育」, ボン大学フランチ・モクラウアー文庫所蔵)

このリストから、本連載のテーマである「ソーシヤル・デモクラシー」社会民主主義との関係は、読みとれるだろうか？ たとえば一九三七年の共著論文「農村人口移動の階級性とその社会経済的諸要因」などに、マルクス主義的方法的影響を見出せないわけではない。他方で、経済自由主義者ハイエークの翻訳も行なっている。ドイツ語著作のタイトルは、執筆当時ドイツで一緒だった笠信太郎「日本経済の再編成」(中央公論社、一九三九年)を想起させる。総じて理論紹介、実証分析が多く、なんらかの思想的立場・方法の一貫性は見出しにくい。これらの学術的仕事からの「社会民主主義」への接近は難しい。

しかし、崎村茂樹の生涯を追いかけると、社会民主主義との奇妙な接点が見えてくる。以下は、むしろ本誌を通じて情報提供を求めたための、崎村茂樹が第二次世界大戦中のストックホルムで接触した社会民主主義「小インターナショナル」についての覚え書きである。

未来

54号

2011年

10月

## 2 戦時在独日本大使館からの「亡命」者・崎村茂樹

政治学者で現代政治・現代史を「情報戦」の観点から研究している私が関心をもつのは、経済学者としての崎村茂樹の業績や生涯ではない。第二次世界大戦期及び戦後占領期の国際情報戦のなかで彼が果たした、数奇な役割である。

それは第一に、崎村が、第二次世界大戦中の一九四三―四四年にベルリンの駐独日本大使館嘱託でありながら中立国スウェーデンに「亡命」し、当時の「ニューヨーク・タイムズ」「タイム」等連合国側メディアで「初めて連合国に加わろうとした日本人」<sup>①</sup>「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」と報道された、希有な体験の持ち主だからである。

第二に、崎村は一九五〇年には中国革命直後の北京に住んでおり、中国側の資料と当時の日本での報道によれば、「毛沢東暗殺未遂事件」に関わったとされる点である。

これまで判明している崎村の生涯はおおむね以下の通りである。

一九〇九年、東京に生まれる。高知高等学校理科乙類から東京帝大農学部農業経済卒業。一九三二年、東京帝大経済学部荒木光太郎教授の助手、のち上智大学講師、東大農学部助手・講師。一九四一年、外務省嘱託として渡独、独ソ戦開始により帰国予定を変更して残留、日本鉄鋼統制会ベルリン事務所嘱託となる。一九四三年、在独日本大使館嘱託時にスウェーデンに渡航して「亡命」、ストックホルムで連合国軍にも接触。一九四四年、「ニューヨーク・タイムズ」で「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」

か？ ③崎村茂樹の一九四三―四四年「亡命」は、連合国軍との「和平工作」を意味するか？ ④いったん「亡命」した崎村茂樹は、なぜベルリンに戻り、ドイツ敗戦をいかに迎えたか？ ⑤一九四五年五月ドイツ敗戦で、崎村茂樹は、なぜ日本に戻らず、中国に向かったのか？ ⑥一九四五年九月以降、崎村茂樹は、なぜ中国に残り、何をしていたのか？

### 3 崎村茂樹のユダヤ人救出とスウェーデン「亡命」

もともと崎村茂樹という日本人の存在を私が知ったのは、五年前、二〇〇六年夏のことである。ドイツのベルリン映画博物館から、日独関係史研究を英語・ドイツ語で発表してきた数人の日本人研究者に宛てて発せられた、一通の電子メールからであった。

それによると、ドイツ統一後のベルリンの象徴として作られたポツダム広場の映画博物館が刊行している映画人シリーズに、戦後西ドイツの著名な女流映画評論家であったカレリーナ・ニーホッフ (Karena Niehoff, 1920-1992) の評伝が加えられることになった。ユダヤ系ドイツ人である彼女の戦時遺品中に、彼女が一九四二―四三年に日本鉄鋼統制会ベルリン事務所勤務し、ユダヤ人用食糧配給券の偽造でナチス・ゲシュタポに検挙されたさい、在独日本大使館嘱託で日本鉄鋼統制会ベルリン事務所のアナリストである「崎村茂樹」という日本人の奔走と助命嘆願書で生命を救われ、戦後に生き残ることができたという資料がある。その「崎村茂樹」とは何者かを知りたい、という問合せであった。

当時、ベルリン映画博物館から連絡を受けた一橋大学勤務の私、東京大学経済学部石見徹教授、成城大学法学部田嶋信雄教授ら七

人」と報道され、ナチス・ゲシュタポと日本大使館の捜索・拘束によりベルリンに強制送還、大使館監視下で軟禁される。

一九四五年、ナチス・ドイツ敗戦で在欧日本人一行と共にシベリア経由満州国へ、しかし日本には帰国せず長春(当時の新京)滞り。一九四六年、在中国・長春米國領事館に通過・経済分析担当で勤務。一九四八年、在北京米國総領事館勤務員、北京陥落・米人民共和国で「米國経済諜報」として逮捕され禁固刑、日本では「毛沢東暗殺未遂事件」に連座と報道される(毎日新聞一九五一年八月二二日)。日本の留守家族は、この報道で初めて、崎村茂樹が戦後に生きていた消息を知る。

一九五五年、拘束を解かれ中国から帰国、矢部貞治学長に請われて、拓殖大学経済学部教授。一九六一年、日本鉄鋼統制会ベルリン事務所時代の上司八幡製鉄島村哲夫常務に請われ、八幡製鉄嘱託、東京理科大学教授(工業特許担当)。ただし、ドイツ・スウェーデン・中国での一五年間の体験については、帰国後家族にもほとんど語らなかつた。一九八二年、食道ガンで死去。

だが、崎村茂樹の生涯は、謎だらけである。ご遺族も、一九四一年の訪独から五五年の中国からの帰国までの「空白の一五年間」について、詳しいことを知らない。私のホームページ「ネチズンカレッジ」には、「崎村茂樹の六つの謎」がかかげられ、現在も情報提供を求めている (<http://www.kijifu.or.jp/~kazoei/home.html>)。

①若き崎村茂樹は、リベラル左派だったのか、親ナチ右派だったのか？ ②崎村茂樹は、なぜスウェーデンに「亡命」したの

人？「崎村茂樹探索ネットワーク」を作り、私の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」を使って、世界中に情報提供を呼びかけた。即座にさまざまな情報が寄せられ、崎村家ご遺族や東京大学農学部関係者からも、ある程度の情報が集まった。

カレリーナ・ニーホッフの評伝は同年中に刊行された。崎村の同盟国日本大使館員の地位を利用した、一九四三年春当時の助手、ユダヤ人女性カレリーナ・ニーホッフへの助命嘆願書を書いたの救済は、カレリーナ自身が戦後に生き残り、嘆願書類や写真を残したことに、事実と認められた(ベルリンの「シンドラーのリスト」<sup>①</sup>「もう一人の杉原千畝」<sup>②</sup>)。私たちのそれまでの、にわかづくりの調査結果も、同書に盛り込まれた (Karena Niehoff, *Funktionistin und Kritikerin. Mit Aufsätzen und Kritiken von Karena Niehoff und einem Essay von Jörg Becker. Film & Schrift, edition text + kritik, München 2006*)。

ただし、当初想定したストーリーは、狂ってきた。私たちは、崎村のユダヤ人救済がナチスのゲシュタポににらまれ監視される理由となり、在独日本大使館の狂信的親独派大島浩大使との関係が悪化してストックホルムに「亡命」したと考えたのだが、どうもこの件で崎村茂樹が処分されたり大使館に居づらくなったという形跡はなかつた。四三年九月のスウェーデン行きは、鉄鋼統制会アナリストとしての「出張」名目であった。

私たちの何人かは、ドイツ、スウェーデンの現地調査を行ない、ドイツ連邦公文書館・外務省史料館やカレリーナ・ニーホッフ家に残された崎村関係資料の収集、当時の現地新聞記事やベルリン、ストックホルムの住所・寄宿先の調査、インタビュを進めた。あわせて探求を、四五年五月ドイツ敗戦時の崎村のベルリン脱出、

シベリア鉄道經由の満州国への入国、日本敗戦後長春での残留、戦後内戦期、中国革命時の活動へと広げていった。その中間報告は、二〇〇七年三月、早稲田大学二〇世紀メディア研究所の公開講演会で評論家佐藤優氏と共にパワーポイント原稿で行ない、「インテリジェンス」誌第九号に「情報戦のなかの『亡命』知識人——国崎定洞から崎村茂樹まで」と題して発表した(二〇〇七年一月、<http://homepage3.nifty.com/kawoue/sakimura.html>)。

「インテリジェンス」論文発表後、公開講演会で一緒に報告した佐藤優氏が、それまで全く証言の得られなかった戦時在独日本大使館関係者のなかから、元外務省アメリカ局長吉野文六氏に私の論文を示して確認を求め、事実と認められた(佐藤優「国家の嘘、第一回ソ連参戦前夜」「現代」二〇〇八年八月号)。さらに米国立公文書館(NARA)所蔵で、現在では日本の国会図書館等でも閲覧可能な連合軍押収文書の在独日本大使館内部記録中に「崎村茂樹問題文書(伯林内務事務所佐藤彰三作成)」(Records of Former German and Japanese Embassies and Consulates, 1890-1945 国会図書館蔵官庁資料室所蔵 YD-176 NARA Microcopy T179, Reel No. 72)を発見し、当時連合国側のメディアでのみ報道され、米国諜報機関(戦略情報局OSS、戦後の中央情報局CIA)に秘かに記録され、枢軸国ドイツ・日本側は否定し沈黙してきた「在独日本大使館員のスウェーデン亡命と連合国との接触」が、史実として間違いないものとなった。

#### 4 戦時中立国スウェーデンで亡命者を助けた社会民主主義

ところが、それでは終わらなかつた。「崎村茂樹問題文書」など新たに発見した資料で、崎村の「亡命」の事実関係はかなり明

した「日本経済の新編成」に続く二冊の本、「日本の農業経済」「日本経済史」を準備していたという。

ベルリン日本大使館とストックホルム日本公使館は、この間、崎村の行方を捜し求めた。また、ナチスのゲシュタポとスウェーデン警察、それに連合国側の英国情報機関MI6、米国情報機関OSSも、戦時在独日本大使館員の中立国スウェーデンへの「亡命」に注目し、秘かに追っていた。

ところが一九四四年五月、崎村の学究的「亡命」生活は、戦時ヨーロッパの情報戦に巻き込まれ、中断を余儀なくされる。きっかけは、「インテリジェンス」論文で紹介した「ニューヨーク・タイムズ」一九四四年五月一日付記事「日本人が大使館から脱走」「タイム」誌六月五日号「抵抗の方法」という米国メディアの報道ではなかつた。英国の新聞と戦時の大衆宣伝メディアであるラジオでのロイター電報道だった。

一九四四年四月二十八日、ゴルトランド講師の紹介状を持って、連合国側有力紙、イギリス「デイリー・メール」ラルフ・ヘーウィンス特派員が、ドイツ、日本の事情を執筆してほしいと、崎村の潜伏先に現われた。「亡命」中とはいえ、平穩な学究生活を望む崎村は、面談はしたものの、反ナチ論文の執筆依頼を断った。

ところがその面談が、「デイリー・メール」五月一日付の「日本人外交官がベルリンから逃亡して語る」「東條の部下から連合国へのアピール」というセンセーショナルな記事になる。ロイター電で世界に配信され、ラジオでも放送されたため、リスボンのホルトガル陸軍武官室や同盟通信のヨーロッパ特派員網もスウェーデン政府と在独日本大使館に問い合わせ、本格的捜索に動きだ

確になったが、肝心の「亡命」の動機がはっきりしないのである。以下は「インテリジェンス」論文のその後の研究にもとづく改訂を兼ねた、一九四三年九月ストックホルムでの崎村の「亡命」から、四四年五月ベルリンへの強制送還までのスケッチである。

崎村茂樹のスウェーデン入国は、一九四三年九月七日で、計画的な「亡命」ではなかつた。前述のように当初は日本鉄鋼統制会の公務出張を兼ねた休暇名目であったらしい。ところが九月一日、読売新聞ストックホルム特派員嬉野満洲雄がベルリンに転勤するにあたっての現地日本人による壮行運動会に参加し、偶発的な事故で足の怪我をした。そこで入院した病院で、レクター・サンドベルグ(Rector Per Sundberg)というスウェーデン人教師と同室になった。すぐに親しくなり、空襲のベルリンには戻らずスウェーデンに滞在することを勧められ、当時ストックホルム大学講師でスウェーデン社会民主労働党思想誌「Tiden」編集長だったトルステン・ゴルトランドが率いていた反ナチ知識人亡命者支援組織に組み込まれた。四三年二月初めから、スウェーデン日本公使館にパスポートを取り上げられた状態のまま、「亡命」生活に入り、行方をくらました。

一九四四年一月には日本外務省囑託を解任されたが、約五〇人のスウェーデン人、一〇人のドイツ人、二人のノルウェー人の支援を受け、労働市場調査の仕事も紹介された。崎村は、戦火を離れ、森と湖に囲まれたストックホルムで、同年輩の経済学者ゴルトランドや、先にドイツから亡命していたドイツ社会民主党(SPD)在外ネットワーク組織者であるユダヤ系教育学者フランツ・モクラウアーらの庇護のもと、ドイツ語で一九四二年に刊行

す。

スウェーデン日本公使館陸軍武官小野寺信と同盟通信ストックホルム特派員齊藤正躬が崎村の隠れ家を見つけたりしく、崎村は「デイリー・メール」記者の捏造記事であると否定したが、弁明を迫られた。ナチスのドイツ通信(DNB)での反論ラジオ番組がただちに組まれ、五月五日にはドイツの新聞にも「崎村教授は英米に利用された」という否定見解が掲載された。一九四四年五月初めの「ゲッベルス日記」には、三回も「崎村教授の事件」が出てくる。

ドイツの外務省・ゲシュタポからは「東京のゾルゲ事件への報復」(ドイツ国籍の「ゲルマン人」であるゾルゲ検挙・裁判への反発)として崎村の身柄引き渡しを要求され、在独日本大使館でも「大逆罪」の声があがったが、どうやら同盟通信齊藤特派員と鉄鋼統制会ベルリン事務所長島村哲夫が説得役になり、在独内務省事務所佐藤彰三とベルリン総領事徳永太郎がストックホルムに赴いて五月二三日崎村を拘束・拉致、ベルリンへの「強制送還」になった。それをスウェーデンの新聞・雑誌は写真入りで大々的に扱い、「タイム」誌六月五日号の記事に繋がった。

以後、ナチス・ドイツに送り返された崎村がどうなったかは、ドイツ外務省史料館所蔵のドイツ政府と在独日本大使館の交渉ファイルや現地調査から「インテリジェンス」論文に記した通りで、日本大使館による奇妙な身柄拘束・軟禁・監視が、四五年五月ドイツ敗戦まで続いた。中国での崎村の波瀾万丈については、ここでは省略する。

## 5 プラントらの社会民主主義「小インテリナショナル」

崎村茂樹の戦時スウェーデン「亡命」を支援し、生活手段まで面倒を見ていたのは、中立国スウェーデンの社会民主主義の活動家たちだった。じつはこのことが、崎村茂樹が「大逆罪」に問われず、戦後まで生き残り得た理由の一つとなった。

一九四四年五月二十八日、在独内務事務官佐藤彰三は「崎村事件に関する調査」を作り、六月一日付で崎村茂樹は「今回ロイター事件は其の波紋極めて大きく全く恐縮に堪えず」という「誓約書」を書かされた。東京の外務省本省・参謀本部にはおそらく連絡されないまま、在独日本大使館内で一件落着がはかられた。すでに日本への公電連絡さえ困難になった欧州戦線の通信事情もあるが、日独同盟に傷をつけない配慮であつたらう。

その過程で、内務省の佐藤彰三、鉄鋼統制会島村哲夫、スウェーデンの陸軍武官小野寺信、同盟通信斎藤正躬らの中で、崎村の「亡命」を大事にしないための策略が練られた。ポイントには、崎村「亡命」時の生活費の出所（スポンサー）、それに、崎村の左翼運動・思想歴、第三インテリナショナル（共産主義インテリ、コミンテルン、一九一九―一九三三年）との関わりだった。

戦時ヨーロッパの日本人特派員の多くは、派遣先取材相手や在外日本人の思想動向を探る諜報員の役割を果たした。斎藤特派員が佐藤彰三にあてた、崎村の身上調査が「崎村事件に関する調査」に付されている。それによると、崎村は「初歩的な唯物論の把握」はあるが、左翼思想・運動歴はなく、「亡命」先のストックホルムでも「第三インテリ系には現在まで何等交渉なし」。ス

ウェーデンの亡命者支援組織から月一五〇クローネほどの援助を受けていたが、それは交友関係を含め「第二インテリ系統」であるから心配ない、むしろ崎村を謹慎させたうえで、彼の学識を今後も日独枢軸国の勝利のために使おうべし、というものであった。つまり、在独日本大使館も在スウェーデン日本公使館も、崎村の「亡命」の背後に第三インテリナショナル系列の共産主義運動があるのではと疑ったが、彼は「第二インテリ系統」の社会民主主義の方だから大丈夫だという、まことに日本的・治安維持法的な発想のおかげで、崎村茂樹の生命は助かった。

小論の問いは、ここから始まる。「インテリジェンス」論文を発表後、ドイツ現代史の専門家である永井清彦氏から、新たな情報が寄せられた。自分が読んだヴィリ・プラントの北欧亡命期の回想中に、ドイツの日本大使館から逃げてきた日本人のことがでてくる。それが「インテリジェンス」論文にある崎村茂樹ではないか、というのである。そしてそれは、永井氏も、佐藤優氏とは別に、戦時在独日本大使館の生き証人吉野文六氏に問い合わせ、間違いないものと確認された。

一九四三―四四年当時のストックホルムには、ナチスに追われたり、戦場・占領地から避難した世界の社会民主主義者が、多数潜在していた。その中心は、ドイツ社会民主党の亡命者組織であり、そこから「ストックホルム民主主義的社会主义者のインテリナショナル・グループ」が生まれた。支援するスウェーデン社会民主労働党員を含め、最大時百人にも満たない、小さな国際連帯組織（別名「クライネ・インテルナツィオナレ」）であつたが、ドイツ、オーストリア、ポーランド、ハンガリー、チェコ、ノル

ウェー、デンマーク、フランス、スペイン、パレスチナ、アイスランド、イギリス、アメリカなどから、ストックホルムに「平和」を求めた社会民主主義者たちが集っていた。それは、戦後ヨーロッパ統合と福祉国家、いや戦後世界の「民主主義的な社会主義」「差異のデモクラシー」の行方にも、大きな意味を持った。

中心的指導者は、亡命中のドイツ社会民主党員ジャーナリスト、ヴィリ・プラントであり、ナチス敗北後、西ベルリン市長から西ドイツ首相までのぼりつめた。一九七一年のノーベル平和賞受賞者である。この組織を共に担った盟友のユダヤ系オーストリア人ブルーノ・クライスキーは、戦後オーストリアで外交官となり、水世中立国の地位を回復、初のオーストリア社会党政権の首相となる。ちょうど亡命時代の「戦友」プラントが、西ドイツで首相になったころだった。

世界から亡命社会民主主義者を受け入れ支援したホスト役は、スウェーデン社会民主労働党員なのかな、反ファシズム国際主義者たちである。中立国スウェーデンの知識人や国際活動の経験者

## 新刊案内

### 私のコリア人間地図

滝沢秀樹 著 三九九〇円

大阪リアンタン、中国朝鮮族自治州ソウルビギンヤン——東シナの厳しい近現代史と同様現代を超えた人々の暖かい交わりをまよやかに描く

第一部 延辺の農村風景と人間地図

第二部 コリア歴史

第三部 朝鮮現代史への証言と歴史の再創造

——「金日成回顧録」の歴史秘録——

### アイヌ口承文学の認識論

歴史的方法としてのアイヌ口承文説話

坂田美奈子 著 アイヌと人間関係史にオルタナティブな視野を提示 五八〇〇円

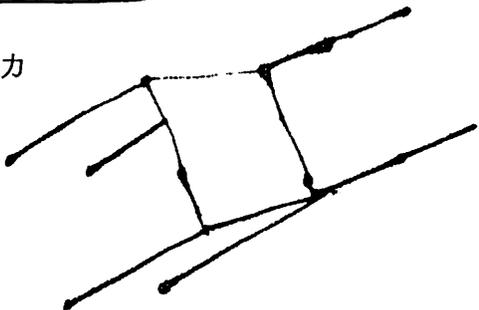
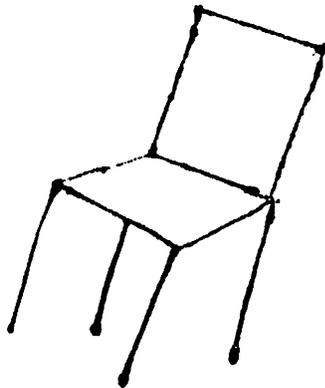
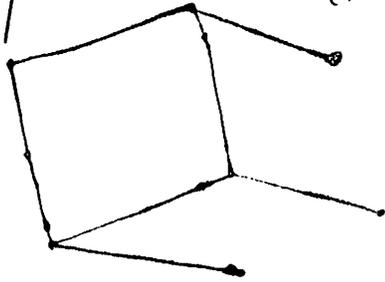
### 「貧困」の社会学

鎌田とし子 著 物質的困窮が生む非人間的な社会を問う 九〇〇〇円

### 御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20  
電話03-5684-0751  
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

未来 2011.10 (No.541)



未来社

画・青野なるみ  
デザイン・戸田ツトム

〈フランス的モメント〉について  
転換のディヴェルティメント22  
小林康夫

さまよう〈帝国〉  
デラシネ備忘録11  
町田幸彦

オガディンに半身を放って  
書簡で読むアフリカのランボー5  
鈴木和成

コロニアル・グラモフォン  
〈沖縄と文学批評〉12  
仲里効

日本の首相交代劇  
ドイツと私38  
永井潤子

普天間の空・普天間の大地はわたしたちのもの  
沖縄からの報告20  
知念ウシ

社会民主主義の国際連帯と生命力  
——一九四四年ストックホルムの記録から  
リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー2  
加藤哲郎

〈書評〉「文化遺伝子」概念が喚起する想像力  
高良勉著「魂振り——琉球文化・芸術論」  
新川明

陽の目を見る写真集「日の丸を視る目」  
未来の窓175  
西谷能英



42

ウィリ・ブランドは、回想に書き残した。「われわれの会合への風変わりな訪問者は、一人の若い日本人だった。彼は、ベルリンの日本大使館で仕事をしていて、われわれを見つけた。日本の秘密警察が彼を追っていたので、彼はある病院に助けを求めた。それから説得されて、ベルリンに戻った。おそらくは、悲劇的結末にいたったであろう。」(Willy Brandt, Links und frei: Mein Weg 1930-1950, Hoffman und Campe, 1982, S. 341. 永井潤彦氏提供、貴重な情報を寄せられた永井氏に感謝する)

無論、ブランドは知らなかった。この日本人の若い経済学者(当時五歳)が生き残り、のちにミュルダールと一緒にノーベル経済学賞を受賞する原理的自由主義者ハイエクの日本への紹介者の一人で面識もあったことを。また、当時のスウェーデン政府大蔵次官・スウェーデン銀行総裁ダグ・ハマーショルドとも会っていたらしいことも。ハマーショルドは、国連事務総長時代の一九六一年、コンゴ動乱時に飛行機事故で亡くなる。死後にノーベル平和賞が授与されたから、「亡命者」崎村のまわりから、戦後五人ものノーベル賞受賞者が出たことになる。

ウィリ・ブランドと社会民主主義「小インターナショナル」を調べるには、ドイツに赴くしかない。ポンのドイツ社会民主党フリードリヒ・エーベルト財団にウィリ・ブランド・アーカイヴがあり、そこで当時の記録が閲覧できるとのことである。今日、北欧社会民主主義の歴史的研究で知られるクラウス・ミスゲルドの学問的原点は、どうやら博士論文での「クライネ・インテルナツイオナレ」の研究だったようだ。

もっとも私の主要な関心は、日本人崎村茂樹との接触と共に、

当時の米国OSSヨーロッパ総局長、スイスのアレン・ダレス(戦後CIA長官)の戦時諜報ネットワークが、ストックホルムの社会民主主義亡命者組織にまで及んでいたかどうかにある。

日本で社会主義の国際連帯といえは、通常「鉄の規律」で結ばれた共産主義のコミンテルン、コミンフォルム系列がイメージされる。私自身も、その系列の歴史と「ソ連邦防衛」に帰結した悲劇を追いかけてきた。

しかし、ナチスに追われ「亡命」したのは、ユダヤ人や共産主義者ばかりではない。第二次世界大戦期には、社会民主主義者も自由主義者も故国を追われ、世界に分散して緩やかなネットワークを保っていた。ストックホルムの「小インターナショナル」もその一つで、そこでブランドやミュルダールの「小インターナショナル」も後の世界を構想していた。それは、ヨーロッパ統合や平和共存、国際通貨体制、貧困国開発援助、「持続しうる地球」に連なるものであったに違いない。共産主義の「現存した社会主義」亡きあと、それは、ある種の社会主義の生命力を示す事例でもある。

そして、その生命力とは、北欧社会民主主義の福祉国家に代表される制度設計・政策体系はもちろんであるが、崎村茂樹のような無名の日本人を「スバイ」と疑うことなく受け入れ、その後の運命を心配するような、人間へのまなざしとネットワークの開放性、「差異のデモクラシー」であった。西欧社会民主主義の「原動力」観についても、「小インターナショナル」関係者からなんらかの示唆が得られないか、私の探求の旅は、なお道半ばである。読者の情報提供を、再度お願いする (karao@fujitsu.jp)。